

2021年1月3日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「エマオはおまえ」ルカ福音書 24 章 28～35 節

主任牧師 加藤 誠

「すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」(ルカ 24 章 32 節)

主にあって、新しい年をいただきました。

世界中が今、100年に一度と言われる大きな困難と不安の時を歩んでいるわけですが、「主にあって」、つまり「インマヌエルの主の伴いをいただいて」、新しい一年を共に、神さまからいただく信仰と希望と愛に期待をしながら歩んでいきたいと祈ります。

さて、今朝の「エマオはおまえ」という説教題をつけさせていただきました。「何だこれ？」と奇妙に思われた方も多いことと思います。実はこれは「回文」といって、上から読んでも下から読んでも同じ、言葉遊びの説教題です。わたしのオリジナルではなく、今から 10 年前、東日本大震災が起こった年の夏に、福島の会津市にある日本基督教団の教会の主日礼拝に出席した時の説教題が「エマオはおまえ」でした。その時の説教の内容はまったく覚えていないのですが、この説教題だけは不思議にずっと心に残っていて、このたび 2021 年最初の主日礼拝の説教をどうしようかと思い巡らしている時に、ふと心の中にこの言葉が立ちあがってきたのです。

新しい一年、わたしはどこに向かって歩もうとしているのか。

エマオか？ それとも、エルサレムか？

エマオへの道は、神への失望と落胆を抱えて、十字架のイエスに背を向けていく道です。それに対して、エルサレムに向かう道は、戸惑いと不安がいっぱいだけれども、もう一度、神を信じてみよう。主イエスが何を伝えようとしたのか。主イエスの十字架に向かう歩みとはいったい何だったのかを聖書から聴き直していこうと、主イエスに向けて心と体を方向転換していく道です。

さて、皆さんはどこに向かって、この一年を歩んでいかれるのでしょうか。

今朝一緒に開いたルカ 24 章には、十字架の出来事に落胆し失望して肩を落とし嘆きながら、自分たちの村、エマオ村戻っていく二人の弟子たちが出てきます。エマオはエルサレムからわずか 10 km ほど西にある小さな村です。この村に住む弟子ということは、ペトロたちのように主イエスの伝道開始からずっと行動を共にしてきたガリラヤ出身の弟子たちとは違い、比較的最近、主イエスの集団に加わった弟子であろうと想像されます。その一人の名はクレオパと記されていますが、もう一人の名は不明です。それはクレオパの妻マリアだったのではないかという説もあるようです(クレオパの妻マリアはヨハネ福音書 19 章で主イエスの十字架を最後

まで、その近くで看取った女性たちの一人として描かれています)。

しかしこの時、二人はエルサレムを後にして自分たちが暮らす村戻ろうとしていました。イエスこそ神が遣わされた本物の預言者であり、イスラエルを解放してくださる救い主であると信じてきた歩みが、無意味な虚しい選択であったと突きつけられたからです。無抵抗で殺された主イエスの姿に衝撃を受け、その主イエスを助け出してくださらなかった神に深く失望し、さらにはガリラヤから従ってきていた先輩弟子たちであるペトロたちのふがない姿にも落胆させられたことでしょう。すべてに落胆し、虚しさに打ちひしがれ、次の一步をどう踏み出したらよいか分からなくなった二人は、エマオに帰ろうとしていたのです。

ところが、そんな二人に主イエスの方から近づいていかれて、彼らに丁寧に聖書を説き明かし、その心に再び信仰の火を灯してくださいました。彼らの信仰の炎は再び燃え上がり、エルサレムの弟子たちのところに戻る力を与えられていったのです。

「エマオはおまえ」。エルサレムに背を向けて、イエスに、神に落胆し、仲間たちに失望し、十字架に背を向けていく私たち。しかし、その失望し、落胆した者を主イエスは追いかけてくれます。十字架は終わりではない。いやむしろ、新しい希望の物語の始まりなのだ！…と。聖書のみ言葉の分かち合いにもう一度立ち帰らせてくださるのです。「神の御言葉は真理であり、命である」、「キリストの十字架において、神の愛は確かに成就したのだ」と。

エマオ村に帰ろうとしていた二人の弟子は、もう一度十字架の主のもとに、そしてエルサレムにとどまっていた弟子たちの交わりに招き直されていったのです。

去年は、新型コロナウイルスによって、また新礼拝堂建築のことで大きく揺さぶられた一年でした。「自分にとって主日礼拝とは何だろうか?」「ほんとうに自分はクリスチャンなのだろうか?」「自分にとって大井教会とは何だろうか?」。それぞれが揺さぶられ、問いかけられた一年であったし、今もまだその揺さぶりの中を歩んでいる一人ひとりではないかと思えます。もしかすると、エルサレムを背にして自分の村に戻ろうと、右往左往している一人ひとりであるかもしれません。そのような私たちは今、新しい年をいただいて、どちらに向かって歩もうとしているのでしょうか。エマオでしょうか、それともエルサレムでしょうか。

その時に覚えないことは、主イエスは私たち一人ひとりを探し出し、追いかけて、道行きを共にしながら、もう一度、聖書を一緒に開こうではないかと、私たちを招き直してくださっているということです。そして十字架の向こうに見える復活の希望に期待して、ここからエルサレムに向けて歩みだそうと呼びかけてくださっている。そのような愛の主の姿を今朝、このルカ 24 章からいただいきたい。そして 2021 年を共に歩み始めたいのです。